

野菜



甘長とうがらし今後の管理



野菜
寺田 到
上島営農指導センター
090-6897-7996

追肥

収穫始めから行う。
※アサヒエース 10 a 当たり 14～20 kg (10～14日
の目安) 又は、液肥を500倍かん水する。

かん水

水分不足は品質に影響が出る為、こまめにかん水を行
う。
※収穫期に水分が不足すると、果実肥大が悪くなるこ
とがあり、曲がり果の原因になる。

整枝

主枝の4本は必ず残す。生育が旺盛になるにつれて
中が込み合う場合は採光を考え間引き・摘芯する。
※日陰で果実が白くなりやすくなるため、光を十分当
てる。

摘果

曲がり果等の不良果は早目に除去する。
※樹勢低下になりやすい。

ネット張り

2段目は1段目より40～
50cmの高さにする。
※1段目は地面から70cm
ぐらいの高さで張り、出来
るだけ主枝4本を広げる。

斑点病対策

Zボルドーを500倍で散布する。(混用はしない・
果実の汚れに注意)

害虫対策

スタークル顆粒水溶剤	2000倍	前日まで	2回	スリップス
アフアーム乳剤	2000倍	7日前まで	2回	オオタバコガ
モスピラン水溶剤	8000倍	前日まで	2回	アブラムシ類

尻腐れ対策

カルシウム剤の散布を行う。(ジューシーカル・スイ
カル・エキカル等)を500～1000倍で散布する。

白絹病対策

リゾレックス水和剤 1000倍 前日まで 2回

果樹



6月の柑橘園管理



果樹
木蜜 栄次
上島営農指導センター
080-1759-0088

梅雨時期は黒点病に注意が必要です。展着剤のアピ
オンEを有効に使用し、防除効果を高めましょう。

1. 病害虫防除

項目	時期	対象病害虫	農薬名	希釈倍数	備考
温州 中晩柑	上旬 ～下旬	カイガラムシ類 ゴマダラカミキリ	スプラサイド乳剤 40	1,500倍	混用
			黒点病	ジマンダイセン水 和剤	
		展着剤	アピオンE	1,000倍	
	中旬	ミカンハダニ	ハーベストオイル	150倍	混用散布
		ミカンサビダニ	サンマイル水和剤	3,000倍	
	下旬	黒点病	ジマンダイセン水 和剤	600倍	

※ハーベストオイルについては、落果の多い樹・樹勢
低下樹には使用を控えて下さい。

※カイガラムシが多い園では、再度エルサン乳剤1,
000倍を散布しましょう。

2. 葉面散布の実施

新梢の緑化の遅れは、生理落果の助長を招きます。
緑化が遅れている園では、チッ素+マグネシウムの葉
面散布で緑化促進を図りましょう。

目的	資材名	希釈倍数	備考
緑化促進	葉面マグ	200倍	混用散布
樹勢維持	尿素 又は アミノジューシーN14又は 神協スピリッツ	500倍	
新梢充実	ジューシーカル	1,000倍	

3. 施肥の実施

栽培タイプ	施用時期	品種名	肥料名	10a 当たり 施用数
通常タイプ	6月上旬	ボンカン・清見 甘夏・河内晩柑 パール柑	熊本果樹肥料 10-7-4 又は ひのくに果樹 9-3-3	5袋
			テコポン	熊本テコポン 8-3-3

4. 粗摘果の実施

早期に摘果を行う事により、残った果実の肥大が促
進されます。基本的には生理落果終了後から行いま
すが、極早生温州など収穫までの日数が短い品種では、
2次落果期頃から摘果を行う事により肥大が促進され
ます。特に小玉の多い「肥のあかり」を中心に内成りや
天成り果を早期に除去して下さい。

5. タイバック被覆の実施 (温州みかんのみ)

早期出荷や品質向上の為、タイバック被覆を実施し
ましょう。

品種	被覆時期
肥のあかり・豊福・肥のさやか	6月下旬～7月上旬
肥のあけぼの・早生	7月中旬～8月中旬



畜舎のハエ対策について



畜産

井上 正一

黒毛牛検定センター
080-1729-1626

ハエなどの害虫発生は、年間を通しての対策が必要です。特に、湿度と温度が同時に上昇するような梅雨期には、ハエの活動が活発になり、一時的にハエが大量発生する場合があります。

ハエは、環境が良いとごく短期間の間に卵⇒幼虫⇒さなぎ⇒成虫へと成長しますので、畜舎からのハエ発生を防ぐためには、成虫よりも幼虫が育つ発生源を絶つ方が効果的です。

対策としては、除糞などによる物理的対策と薬剤などによる化学的対策がありますので、状況に応じた方法で駆除をしましょう。

1. 物理的な駆除

ハエの主な発生源は糞尿・餌・水です。これを取り除くことが、対策の第一歩です。畜舎内での糞や残餌をこまめに除去することで、ハエが羽化する場所を無くし、ハエの発生を押さえることができます。また、畜舎内の清掃をまめに行うことにより、衛生環境も改善され、家畜に与えるストレスも低減されます。

ハエは最適な条件では1週間程度で成虫になりますので、ハエ防除のためには7日に1度程度の除糞作業が必要になります。特に、除糞直後の水分が多い新鮮糞は、ハエの格好の産卵場所になりますので、完全な除糞ができずに中途半端な状態のままにしていると余計にハエの発生を招く恐れがあります。**ハエの発生の最盛期には7日以内に除糞を行い、1～2日以内に堆肥化などの処理を行ってください。**



2. 薬剤による駆除

ハエの殺虫剤による駆除は、薬剤の効果により幼虫の殺虫を目的とする幼虫対策と成虫の殺虫を目的とする成虫対策に分かれます。

(1) 幼虫対策

ハエの発生防除には、飛び回る成虫よりも羽化前の幼虫を駆除の方が効率的です。発生源の幼虫を駆除するには、昆虫発育抑制剤（IGR剤）を幼虫に散布して脱皮や羽化を阻害し、成虫の発生を防ぐ方法があります。畜舎内に糞がたまるような場合、幼虫の発生場所へIGR剤を散布します。IGR剤は一定期間の残効がありますので、ハエの発生予防には、除

糞1～2日後に散布をしたら3週間程度の間隔を置いて完全除糞をし、これを繰り返します。ただし、十分にIGR剤を散布できなかった場合は、糞の滞留がかえってハエの発生や衛生環境の悪化を引き起こしますので、充分留意してください。

(2) 成虫対策

成虫に対する対策方法としては、毒餌、残留噴霧、空間噴霧などの方法があります。

【毒餌法】

ハエの成虫が好む餌と殺虫剤を混合したベイト剤を作り、ハエの休息場所に仕掛けます。散布しないので労力もかからず家畜などへの影響を防ぐことができますが、大量発生時にはあまり効果が期待できません。

【空間散布、残留散布】

大量にハエの成虫が発生した場合には、成虫に対し殺虫剤を散布します。空間散布は直接的に成虫に向けて散布する方法で、畜舎内のハエを一時的に減らす際には有効ですが、殺虫剤が残効しないため、たびたび散布しなければなりません。また、家畜への影響も注意しなければなりません。

一方、畜舎の壁、柱、天井などのハエがとまる場所に殺虫剤を散布して残留させ（残留散布）、それらの表面に殺虫量をもたせておく方法もあります。ただし、この方法は大量発生時には駆除が追いつかない欠点があります。

ハエの大量発生時の対応手順

①残留噴霧と空間噴霧による成虫駆除→②畜舎内の早急な除糞→③IGR剤による幼虫駆除
(複数の方法を組み合わせることにより、防除が効果的に行えます)

対象	方法	薬剤	特徴
・幼虫駆除	直接噴霧	IGR剤(成長抑制)	効果は高いが価格も比較的高い。
・成虫駆除	直接噴霧	ピレスロイド剤	即効性があるが効き目が短時間。
	残留噴霧	有機リン剤	即効・残効性があるが耐性が出やすい。
毒餌		クロロニコチニル系剤	新しい薬剤、ヒメイエバ工には効かない。

- 同じ種類の薬剤を使い続けるとハエが耐性を持つてくるので、長期使用時には薬剤の種類をローテーションさせましょう。
- 殺虫剤は指示書に基づき用法・用量・休薬期間を守り、飼養記録をつけましょう。



農作業メモ



水稻

吉田 義文

指導販売部
0969-22-1105

品質維持は水管理で

登熟を向上させるためには、根の老化を防ぎ、刈り取り直前まで活力を維持することが大切です。

そのため、間断かん水による水管理を励行しましょう。収穫前の早めの落水は、乳白・心白・腹白米や粒張り不足・胴割れ米の原因となり、品質や食味を落とします。

田んぼの排水路・排水溝を整備して、稲刈りに支障のない限り落水期は延長してください。(刈り取り5～7日前まで水田を乾かさないようにしてください。)

適期刈り取りの励行について

1穂初めの85%(初黄化率)程度黄色く熟れる頃が収穫最適期です。茎や葉が緑色であっても初めは黄色くなっているこ

とが多いので、注意が必要です。目安は出穂期(ほ場の40%程度出穂した日)から30日たった頃です。

病虫害防除

いもち病、カメムシの予防防除対策として出穂期と、穂揃い期の2回の防除を行ってください。散布の際は使用基準を遵守し、飛散等のないよう心がけてください。また、散布された際には、栽培管理台帳への記入をお願いします。

農薬の使用上の注意事項

農薬を使用する前には、ラベルの適用内容及び注意事項を必ず確認し、適切に使用してください。作業中は農薬マスク、手袋、防除衣など適切な保護具を着用して作業しましょう。